様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月　 ６ 日現在

機関番号：１２６０４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2016
課題番号：２６３８１１８１

研究課題名（和文）大阪万博以降の美術ジャンル・主題をめぐる論点と図画工作・美術科教育内容への影響

研究課題名（英文）How Art Genres and Themes Presented at Expo'70 Influenced Art Education Subject Matters

研究代表者
山田　一美（Yamada, Kazumi）

東京学芸大学・教育学部・教授

研究者番号：８０２１０４４１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,100,000円

研究成果の概要（和文）：大阪万博期の現代美術は、1960年以後の新しい芸術家たちによって、メディア、操作、行為、概念、プロジェクトなどに関わり、平面・立体のジャンルを超える様相を示した。その主題は、輝かしい未来社会・都市を想像させ、博労小学校の図画作品に影響を与えている。一方で、現代美術は予期せぬ機械システムの暴走、環境問題等、現実と近未来への批判的な主題を提示した。大阪万博は同様に、開発・技術革新と，持続可能性という対峙する課題に直面していた。これら異なる態度の主題が美術教育内容に反映される場合、子どもたちは「自己内主題」の創出力と、解決・実現のための「構想力」という汎用的資質・能力を必要とすることが見出された。

研究成果の概要（英文）：Japanese modern art at Expo ’70 involved the media, operation, action, concept, project, etc. of new artists after 1960, showing aspects beyond two- and three-dimensional genres in visual arts. A majority of the themes/subjects inspired people to imagine bright futuristic cities/societies and influenced children’s drawings at Bakuro Primary School in Japan. On the other side, Japanese modern artists of the time expressed critical themes/subjects on reality and the near future, such as the unexpected recklessness of mechanical systems and environmental issues. Similarly, Expo ’70 dealt with the confronting issues of development, technological innovation, and environmental-cultural sustainability. If these varying themes/subjects created from differing creative attitudes are reflected in art education content, children are required to have the generic skills/abilities of “creating intrapersonal themes/subjects” and “conceiving ability on their own” for solution and realization.

研究分野：美術科教育学

キーワード：大阪万博　テーマ・主題の生成　コンピテンシー　教科内容　図画工作科　美術科　構想力　現代美術

１．研究開始当初の背景

（１）「美術主題」の喪失

研究代表者はこれまで学校美術教育と題材概念の関係について研究をすすめてきている。その過程で、一般美術にかかわる「題材」概念を並行して整理してきた。例えば、今日の大きな美術展の図録解説を見ると、「題材」概念は、「主題」と密接に絡み合う。題材と主題の関係はどうあるのか。その関係を整理することは、学校美術教育の題材概念を描くためにも必要であると考えた。

そこで、近年に開催された美術館展の図録から、題材と主題の関係を整理した。対象として、古典美術を含む充実した美術館展、すなわち大英博物館展、ベルリン美術館展、マウリッツハイス美術館展の図録に掲載の論文と作品解説を検討した。大英博物館展については、トロイアの王プリアモスがアキレウスの息子ネオプトレモスに惨殺される物語の主題について取り上げた。マウリッツハイス美術館展では、ルニア氏の論文「日々の暮らしに目を向けて－17 世紀のオランダ絵画」にみる主題・題材概念について検討した。ベルリン美術館展では、尾崎彰宏氏の論文「オランダ絵画のパラドックス」の主題・題材観、そのほかリーメンシュナイダーの作品に対する解説などを取り上げた。

以上の考察から、歴史画・宗教画・神話画において、物語の場面との関係で「主題」は必要不可欠であったが、17 世紀オランダ絵画に特徴的な風景画・静物画・風俗画において、それは欠落したものとなっている。物語的「主題」に代わり、そこに登場するものは可視的構成要素の「題材」や「モチーフ」であった。フロマンタンがオランダ絵画論から「静物画」を対象外としたのは、「主要な主題」を優先させて論評したからだと考えられる。高橋裕子は、こう指摘する。

「覚え書にはわずかながら静物画への言及があり、フロマンタンが決してこの分野に無理解ではなかったことがわかる。完成原稿（※『昔日の巨匠たち』を指す。）で静物画が語られないのは、要するにそれが語り得ぬものだからではないだろうか。静物画の魅力とは、まさに『それが目の前にある』ということに帰着する。」[1)]

この特徴は印象派に引き継がれるのだが、フロマンタンやレイノルズが洞察したように、「主題」から「題材」へという転換が図られていくことを物語る。つまり、物語的なエピソードをもつ歴史・宗教・神話の一場面を表現してきた絵画から、それを必要としない絵画が誕生した。「主題」では語られず、事物の対象としての「題材」（モチーフ）で語るしかなかった。「読む」絵画から「見る」絵画への転換がここにあった。美術と文学の関係からすれば、「主題」の中心はギリシア悲劇の劇作文やルネサンス期の人文主義、さらには新プラトン主義などの社会的思想や副産物との関連が深い。このことから、「主題」の設定に向き合わない、またはそれを喪失した絵画の展開は、主題と題材の関係を変容させていく契機となった。絵画を語るための「描写された対象」の概念、すなわち「題材」や「モチーフ」が、「主題」の概念に代わる言葉となったのである。

かくして、フランスの絵画・彫刻王立アカデミーを頂点する「歴史(物語)画」は、「風景画」「生物画」「風俗画」などの「新ジャンル」を生み出し、20 世紀に至って「抽象絵画」「前衛」が登場するに及んで、「ジャンル」「主題」は大きく変容することとなった。これらの論点を踏まえると、日本において静物画、風景画を中心とするかつての学校美術教育が、「主題」で語らず、「題材」という概念によって「表現する内容」を押さえようとした背景が見えてくる。

（２）大阪万博と現代美術

1970 年、大阪吹田市にて日本万国博覧会(EXPO'70)が半年間開かれた。テーマは「人類の進歩と調和」であり、アジア初の戦後最大級の国家プロジェクトとなっている。入場者数は 6,421 万人を超え、高度経済成長期における復興の象徴的祭典となった。各パヴィリオンでは、当時の最新のテクノロジーを駆使して「輝かしい未来」のイメージが紹介され、新聞・雑誌・テレビのメディアによるキャンペーンにより、一般市民に大きく注目された。この万博に対して、懐疑派・反対派も活躍するが、万博会場を彩るべく参加した前衛芸術家たちが、「万博芸術」の担い手となって 70 年代以降の潮流をつくっている。

主な前衛芸術家は、岡本太郎、「実験工房」(山口勝弘、秋山邦晴)、「ネオ・ダダイズムオルガナイザー」(吉村益信)、「もの派」(関根信夫)、「メタボリズム」、「具体」などである。とくに、お祭り広場(太陽の塔が立つ広場)では、吉原治良がプロデュースし元永定正が構成を担当した「動く美術と光の広場」「旗、旗、旗と光の広場」が作られ、「空間」をも作品化する当時の美術潮流をつくり、また未来志向の近作発表の場となっている。そのほか、ヨシダミノルは、透明なプラスチックを使用した近未来車をイメージした作品を、磯崎新は〈親子ロボット〉を提示している。こうした動向は、1960 年代半ば以降の前衛美術集団として多様な実験性を示すとともに、欧米、日本のアート・シーンで流行していた「脱ジャンル的」「インタラティヴな」、いわゆる「環境芸術」運動に呼応した現代アートと重なっている。

（３）検討が求められる論点

①「美術ジャンル・主題」概念研究の混乱：＜成立史の視点＞美術科内容学研究の基礎研究であるはずの「ジャンル・主題」概念の論点整理がいまだになされていないのが現状である。とくに、前衛芸術が華々しく展開された大阪万博が学校教育にどのように影

響を与えたかについて、教科内容学的な観点から論点が整理されていない。
＜教科間の共通概念の視点＞小・中学校の各教科で使用される「主題」概念の比較が整理されていない。
②「美術ジャンル・主題」と「活動内容」の連関性研究の欠如：
「題材研究」は学生にとって「教育実習」の最重要課題である。しかし、現在の多様な経験単元の実践的取組を踏まえ、「美術ジャンル・主題」と「活動内容」の関係を理論的に説明できる研究成果が見当たらない。
③カリキュラム研究の脆弱性：
図画工作科・美術科の題材設定と主題の関係について、理論的枠組みを検証する研究が脆弱である。この研究領域は、過去の論争を引き合いに出す範囲に限定されている。

２．研究の目的
（１）大阪万博期の美術ジャンル・主題
本研究の目的は、第一に、「大阪万博(1970)」期の前衛・抽象美術における美術概念のジャンル・主題・題材の定義と論点がどう位置付けられたかを明らかにする。第二に、同時期の図画工作・美術科の教科内容の用語(ジャンル(分野・領域)、主題、題材)の定義の変容について、図画工作・美術科、教育行政資料にどう影響したかを明らかにする。
とくに、以下の事項を取り上げ、万博期をめぐる前衛・抽象美術が与えた影響とジャンル・主題・題材の概念変容についての論点を、資質・能力論を踏まえた現在の教科内容学の視点から整理する。
①教科性確立のための新ジャンル(絵画・彫刻・デザイン・工芸・鑑賞)と分析的・系統的「デザイン教育」の導入(1969)
②大阪万博期の「デザイン教育」の混乱
③「デザイン教育」の代替・再生ジャンルとしての「造形遊び」への連絡
図画工作・美術科における教育用語「主題」は、西洋古典絵画の「歴史(物語)画」の中心課題である「主題」概念から影響を受け、小・中学校の教育内容として独自に受容され位置づけられてきた。本研究では「ジャンル・主題」の教育内容化の経緯と論点を整理しつつ、大阪万博以降、前衛的な現代アートの展開を受けて、資質・能力論を踏まえどのように学校教育に浸透していたのかを究明する。

（２）予想される結果と意義
学校美術の「ジャンル」「主題」「題材」の定義・関係について、「大阪万博」期前後の現代アートの展開と論点を整理することにより、いわゆる 5 領域「絵画・彫刻・デザイン・工芸・鑑賞」の枠組と「主題」の関係、さらに新しい領域「造形遊び」がどう組み入れられたかについて、解明する手がかりを得ることができる。

３．研究の方法
（１）平成２６年度
平成 26 年度は、①1960 年代までの「絵画」中心のジャンル・主題・題材について、②大阪万博を頂点とする前衛・抽象美術の主義・主張、方法の特徴について整理する。③1950～1960 年代の『美育文化』『教育美術』を分析し、前衛・抽象美術の主題・題材・方法の影響を明らかにする。④同様に、1960 年代の教科性確立のための「デザイン」の主題・題材を前述の雑誌から分析する。

（２）平成２７年度
平成 27 年度は、①1970 年代の「現代アート」のジャンル・主題を分析する。さらに②1970 年代に混乱を極めた「デザイン教育」の実像を、同雑誌から分析・評価する。最後に、③1970 年代の「造形遊び」に関する「総合性」と、内容としての「主題・題材」の動向を分析・評価する。

（３）平成２８年度
平成 28 年度は、大阪万博を取り巻く前衛・抽象表現美術の影響、デザイン教育の登場と混乱、総合化と造形遊びの導入について、総合的な視点からその変遷・特徴を描き論点をまとめる。

４．研究成果
（１）平成 26 年度
19・20 世紀の美術動向は「イズム」を中心とする運動に支配される。ここには対立軸や主義主張、創造性が高く掲げられ、様々な芸術的実験を通して、領域・分野のジャンルと表現素材は拡張した。その結果、前衛派は「フォーヴィズム」「キュビズム」「シュルレアリスム」「抽象」「ポップ」「ミニマリズム」等、多様な主義・主張・方法を見出している。
平成 26 年度の研究計画では、次の４点の成果を得る予定であった。①1960 年代までの「絵画」中心のジャンル・主題・題材。②大阪万博を頂点とする前衛・抽象美術の主義・主張、方法の特徴。③1950～1960 年代の『美育文化』『教育美術』の雑誌分析をもとにした前衛・抽象美術の主題・題材・方法の影響の解明。④1960 年代の教科性確立のための「デザイン」の主題・題材の分析。
そのため、次の関連展覧会・講演を中心に情報収集した。「ロイヤル・アカデミー展」では風景画ジャンル・風俗画の主題・様々なジャンルの芸術、作品の画題、道徳的・日常的・文学的主題、歴史画と動物画の主題・画題について。「ノルマンディー展」では風景画の始まりについて。「新印象派展」では象徴的な「第 8 回印象派展」(1886)について。「ウィレム・デ・クーニング展」では関連講演から抽象表現主義の主題について。「高松次郎ミステリーズ展」ではオブジェ・彫刻・絵画・ドローイングと世界的な評価について。「赤瀬川原平芸術原論展」では 1960 年代から現代までのネオダダ、ハイレッドセン

ター、反芸術論、「オブジェ」論について。「東京オリンピックと新幹線展」では大阪万博に先立つ芸術作品展示について取材調査をして知見を得た。

また、今日の21世紀型スキル論やOECD2030プロジェクトのキー・コンピテンシー論の登場により、教科内容を資質・能力の視点から再検討することが不可欠となった。この視点を踏まえて、大阪万博で生きて働いていた資質・能力はどのようなものかを合わせて検討していくこととした(口頭発表：山田一美「『理解をもたらすカリキュラム設計』における「解釈」「共感」の観点は美術教育を可能とするか」2014 年)。また、「現代アート」「美術」「デザイン」の特質と子どもの資質・能力の観点から、教科教育学における美術教育分野の独自性と汎用性について、『図工・美術科教育』（2015）に分担執筆した。

（２）平成 27 年度の実績

以下、平成 27 年度の実績概要を時系列で示す。1970 年代の「現代アート」のジャンル・主題の分析については、前提となる「デ・クーニングと抽象表現主義の主題」を加え、関連文献(リアーズ『近代への反逆』、グリーンバーグ『近代芸術と文化』ほか)、高松次郎・赤瀬川原平らの現代美術の動向把握、及び資料を収集した。また、大阪万博を支えた美術・デザイン活動を分析する過程で、亀倉雄策らグラフィック・デザイナーの成立や、真鍋博らイラストレーターの活躍により、新ジャンルのポスター芸術・広告、マーク、ピクトグラム、イラストレーションが啓蒙・開発・活用（多用）され、学校教育の内容化が進んできた実態を捉えることができた。

美術評論家、瀬木慎一は「日本の現代美術」が確立されたという確信を、①パリやニューヨークに在住の 100 人を超える日本人芸術家の作品発表の動向、②国際展における受賞者の動向、③国内において日本の現代美術を一定数の優れた芸術家が存在している点を指標として論じている。

瀬木は、過去 150 年間の二元的な美術の在り方を打破し戦後の日本の近代化を推進し、次世代の国際展で活躍してきた現代芸術家たちが、美術の近代化の過程において、「創造的意義」と「個性的な様式的な特徴」を「抽象」という形象で表現してきたことを指摘する。

こうした日本の抽象画家が現代美術にいかように貢献したかは次の四点に整理される。

①純粋な感覚によって、絵画をドグマ(教義・教理)から解放すること。事例：岡田謙三

②技術への隷属から絵画を救い出すこと。事例：山口長男

③生動(生き生きとして動き出しそうな様)による絵画の発展。事例：斎藤義重

④記号の改新による絵画の内容の豊富化。事例：菅井汲

しかし、1960 年代に入り、かれらの新しい動向に加え、別方向から台頭しはじめた新しい世代の芸術家たちが出現する。これら新しい芸術家、または「反芸術家」と呼ばれる人々は、過去(抽象美術と直結していた伝統的美意識)と断絶し、超近代的な産業国日本の現実に向き合い、「独自の未来」を企図していった。かれらは、発展する産業テクノロジーとメディアを積極的に採用し、作品を生み出している。

これらの動向は、かつての日本には見られない新しい現象となった。1970 年の大阪万博にあっては、多数の現代美術家が参加し、彼らの中には、1960 年代のテクノロジーを駆使し、あるいは環境的な芸術の実験を行った。同時に、彼らは総合芸術家としての力を発揮した。瀬木は、彼ら新しい現代美術家に、2 つの異なる創造的態度を見出しているが、大阪万博に積極的に参加した新しい芸術家たちは、①の態度が顕著だという [2)]。

①未来人のオプティミズム

②現実へのより強い批判的態度

1970 年代「デザイン教育」については、亀倉雄策らが牽引したデザイン活動の特質について整理を進め、美術科教育学会にて発表した（口頭発表「大阪万博と美術科教育の学習内容に貢献した亀倉雄策の影響」2016 年)。「ジャンル・主題・題材」論の分析については、主要 2 氏の論文に絞り、要点の描出と論点整理を進めた。1970 年代の「造形遊び」に関する「総合性」と、内容としての「主題・題材」の動向については、雑誌「美育文化」「教育美術」から分析・考察を継続している。また、「日本美術教育連合」の発表では、1970 年代のデザイン教育が現在のコンピテンシー観と比較してどう考察されるかを示した（口頭発表「2030 教育モデルと美術科教育における人間性育成の検討」2015 年)。

以上、論点の整理は進んでいるものの、成果物作成と学会等への投稿に遅れが見られ、平成 28 年度に繰り下げた。このことから、平成 27 年度計画を調整し、スケジュールを修正した。

平成 27 年度の総括として、美術科教育学会研究発表(平成 28 年 3 月)で締めくくり、次年度の計画のスケジュールを見直し、報告書の印刷を平成 28 年度に変更した。

大阪万博後の「デザイン教育」の混乱と、「デザイン教育」の代替・再生ジャンルとしての「造形遊び」(1977)の導入、万博期をめぐる前衛・抽象美術が与えた影響とジャンル・主題・題材の概念変容等に関する論点を、現在の教科内容学の視点から整理することに活用した。補充調査として、平成 28 年度に大阪府日本万国博覧会記念公園事務所を訪問調査し、事務所保管の当時の写真資料・文献資料、及び当時収集された児童作品等を分析・考察し、これらの有力な具体物をもとに本研究の成果を補完していくこととした。

また、ホームページへの掲載について、成果物が得られ次第、研究ノート、研究資料、論文の 3 つのレベルでまとめ、公表できるように計画修正した。

（３）平成 28 年度の実績

平成 28 年度の計画は、大阪万博を取り巻く前衛・抽象表現美術の影響、デザイン教育の登場と混乱、総合化と造形遊びの導入について、総合的な視点からその変遷・特徴を描き論点をまとめることである。

これに従い、前衛・抽象表現美術の影響については、万国博美術展におけるテーマ・表現様式と現代美術のジャンル・主題の広がり、展示方法をもとに、万博美術館図録を検討した(『美術教育学研究』第 49 号)。次に、大阪府日本万国博覧会記念公園事務所における聞き取り調査を 2 回に分けて実施し、研究内容にかかわる関連資料を得た(9・10 月)。デザイン教育の登場と混乱については、口頭発表「「論文ダイジェスト」(『日本美術教育総鑑』所収)におけるデザイン教育の諸課題」(第 39 回美術科教育学会、静岡市：2017 年)にまとめ発表した。総合化と造形遊びの導入については、デザイン教育の諸課題に関連させ、低学年の内容領域としての造形遊びの位置づけを総合的な視点から検討・発表した。

大学研究室用ホームページの作成を行い、投稿論文「日本万国博を契機に拓かれた美術教育のコンピテンシー」を掲載し、メディア公開した。これらは、基盤研究(C)『平成 28 年度研究実績報告書』(2017 月 3 月発行：全 98 頁)に整理した。

前年度の課題であった主題・題材論研究については、「題材・主題論の検討」として研究者２名の関係論文を整理し、東京学芸大学紀要に投稿した。蝦名論文では「鑑賞教材開発における題材観と題材例」(2009)ほか４本の関連論文を分析し、題材の概念・題材の設定・編成の在り方、題材化の意味を整理することができた。立原論文では「主題表現法に基づく鑑賞及び評価能力育成」(2009)ほか６本の関連論文から、「題材論的方法」「主題表現」と「主題形成」、主題類型の特質・可能性を整理することができた。加えて、主題に関する坂本小九郎の主題・意味生成理論と大阪万博における岡本太郎のテーマ設定の分析を通して、自己内に二次的に生成される主題の役割を描きだすことができた。

以上、平成 28 年度における研究成果は、前年度の研究計画の遅れを克服し、「大阪万博以降の美術ジャンル・主題をめぐる論点と図画工作・美術科教育内容への影響」をまとめることができ、おおむね成果報告に到達することができた。

（４）まとめ

本研究では、大阪万博について、美術教育の視点から、①理念とテーマ、②アートディレクターとアートプロデューサー、③シンボルマークとピクトグラム、④館内ディスプレイと屋外造形、⑤万国博美術展のテーマと現代美術、⑥テーマ「夢・未来」等の問題と、そのジャンル・主題の関係について検討してきた。その視点をもとに、学校教育における図画工作・美術の内容がジャンル・主題・題材という概念に関連して大阪万博を契機に変容しているのではないかという仮説を立てた。また、これら①～⑥の検討を通して、大阪万博において生きて働いた資質・能力を捉えると、その１つに「構想力」の問題に繋がっている。その検討の材料として、文部省発行の『小図工指導書』（1960）及び『構想段階の指導』（1976，1986）を仮説立てのためのサンプルとして一例を取り上げた。

それらサンプルの分析から、大阪万博において表現された美術・造形的な多様な表現は、ジャンルや主題に関わって教科図画工作・美術へ影響を及ぼしているという仮説立てを可能にした。今後、前述の①～⑥のそれぞれについて、教科書内容や題材の比較を丹念に行い、その結果を明らかにしていくことが必要である。万博という国レベルのプロジェクトに対して、その是非について社会・文化的背景から賛否両論はあるにせよ、大阪万博の展示やイベントは、教育行政の視点、教科書題材、実際の子どもの作品に大きな影響を与えたと想像する。

とくに、大阪万博の演出が輝かしい未来社会・未来都市を想像させ、博労小学校の図画作品が示すように子どもたちのイメージに投影されていることは、その影響力の有無について検討する意義はあると考える。また、大阪万博の実践は、統一テーマ「人類の進歩と調和」を通して、開発主義・創造主義・科学技術主義等と、それに対峙する環境・人間性回復・持続可能性等との地球規模の課題に直面したものであるとも考えられる。

そして、これらの大きな影響があったと仮定するならば、子どもたちが問題解決すべき課題は、所与のテーマや題材に対して、考えずに鵜呑みにせず、自分自身で自己のテーマを考え抜き、それらを実現のために「構想」していく個人内の主題の創出力が必要であるとの結論を得た。

1950 年代後半から、学校における美術教育は、絵画・彫刻（彫塑）・デザイン・工作（工芸）・鑑賞という戦後のジャンル構造の構築を経て今にいたっている。そして、それらを通底する汎用的能力の１つとして考えられる「構想力（想像力を含めて）」は、国や団体から提示されるテーマや主題を超え、各個人が、子ども一人一人が、さらなる自己の主題やコンセプトを構築していく原動力であると考えられる。大阪万博の実践は、その契機の大きな１つとして受けとめられる。

＜引用文献＞

1) 高橋裕子「解説」(『オランダ・ベルギー絵画紀行』（下）、岩波書店、1992 年、

p.320.）
2) 瀬木慎一、日本の現代美術、美育文化、20(12)、1970:25-35.

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計７件）

① 山田　一美、平成 26～28 年度科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究(C)平成 28 年度研究実績報告書、査読無、2017、1-98.
② 山田　一美、大阪万博以降の美術ジャンル・主題をめぐる論点と図画工作・美術科教育内容への影響、美術教育学研究、査読有、第 49 号、2017、441-448.
ISSN: 0911-5722
③ 山田　一美、日本万国博を契機に拓かれた美術教育のコンピテンシー－国際児童画展、ピクトグラム、パフォーマンス等から－、日本美術教育研究論集、査読有、第 50 号、2017、83-90.
④ 岸　学、山田　一美、第１章プロジェクトの概要第１節第２節概要、山田 一美、柄本 健太郎、第３章第２節授業分析の枠組み、「OECD との共同による次世代対応型指導モデルの研究開発」プロジェクト－平成 28 年度研究活動報告書－報告書 Vol.2、査読無、東京学芸大学次世代教育研究推進機構、2017、6-12、31-40.
⑤ 山田　一美、ほか、第１章プロジェクトの概要（第１節背景・第２節概要）、「OECD との共同による次世代対応型指導モデルの研究開発」プロジェクト－平成 27 年度研究活動報告書－、査読無、東京学芸大学次世代教育研究推進機構、2016、6-11.
⑥ 山田　一美、題材・主題論の検討－立原慶一・蝦名敦子論文をもとに－、東京学芸大学紀要芸術・スポーツ科学系、査読無、第 68 集、2016、53-68.
⑦ 相田　隆司、西村　徳行、山田　一美、栗原　正治、図画工作科で育成するグローバルコンピテンシーに関する一考察－指導者の働きかけを軸とする知識・技能、教科横断的スキル、態度・価値の相互作用分析を通して－、東京学芸大学紀要芸術・スポーツ科学系、査読無、第 68 集、2016、35-51.

〔学会発表〕（計８件）
① 山田　一美、「論文ダイジェスト」(『日本美術教育総鑑』所収)におけるデザイン教育の諸課題、第 39 回美術科教育学会静岡大会、2017 年３月 28 日、静岡県コンベンションアーツセンター（静岡県・静岡市）
② 山田　一美、関口　貴裕、細川　太輔、柄本　健太郎、宮澤　芳光、ほか、21 世紀のコンピテンシーを育成するための指導・学習のあり方とは?　－OECD との協働による指導/学習モデルの提案－、東京学芸大学次世代教育研究推進機構(NGE)シンポジウム、2017 年３月 11 日、東京国際フォーラム（東京都・千代田区）
③ 山田　一美、日本万国博を契機に拓かれた美術教育のコンピテンシー -国際児童画展、ポスター、マーク、パフォーマンス等から-、公益社団法人日本美術教育連合第 50 回日本美術教育研究発表会、2016 年 10 月 16 日、東京家政大学（東京都・板橋区）
④ 山田　一美、相田　隆司、西村　徳行、栗原　正治、小学校図画工作科授業における次世代の資質・能力育成の取組、平成 28 年度日本教育大学協会研究集会、2016 年 10 月 15 日、富山県民会館（富山県・富山市）
⑤ 山田　一美、大阪万博以降の美術ジャンル・主題をめぐる論点と図画工作・美術科教育内容への影響、第 55 回大学美術教育学会北海道大会、2016 年９月 25 日、北海道教育大学（北海道・札幌市）
⑥ 山田　一美、大阪万博と美術科教育の学習内容に貢献した亀倉雄策の影響、美術科教育学会、2016 年 03 月 20 日、大阪成蹊大学・短期大学（大阪府・大阪市）
⑦ 山田　一美、2030 教育モデルと美術科教育における人間性育成の検討、公益社団法人日本美術教育連合第 49 回日本美術教育研究発表会、2015 年 10 月 18 日、東京家政大学（東京都・板橋区）
⑧ 山田　一美、『理解をもたらすカリキュラム設計』における「解釈」「共感」の観点は美術教育を可能とするか、公益社団法人日本美術教育連合第 48 回日本美術教育研究発表会、2014 年 10 月 19 日、東京家政大学（東京都・板橋区）

〔図書〕（計１件）
① 増田　金吾、相田　隆司、石川　誠、竹内　とも子、嶽　里永子、立川　泰史、西村　徳行、平野　英史、丸山　圭子、山田　一美、山田　猛、一藝社、教科教育学シリーズ⑧図工・美術科教育、2015、233(24-35、66-77)

〔その他〕
ホームページ等
http://www.u-gakugei.ac.jp/~yamadaka/

６．研究組織
(1)研究代表者
山田　一美　（YAMADA, Kazumi）
東京学芸大学・教育学部・教授
研究者番号：80210441